

チリ・パタゴニア1968-69 —ある学生探検の記録

第1回

探検部とは

安成哲三 やすなり てつぞう

名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学, 地球環境学)



イラスト=安成 晶

山登りから探検へ

1966年もおしせまった12月のある夜、ぼくたち3人(伊藤隆^{*1}, 井上民二^{*2}とぼく)は、井上の下宿でこたつに入り、ウィスキーをちびちびやりながら、世界地図を前に話し合っていた。当時、山岳部員だったぼくたちは、1回生として、はじめての雪山でのスキー合宿をまぢかにひかえ、何かとおちつかなかった。が、話ははずんだ。

「ビルマ奥地はオモロイやろな」、「いや、やっぱりアマゾンやで」、「カムチャッカか千島やったら、ソ連となんとかうまいことしたら、あとは漁船で行けるぞ」などなど、地図帳をひっくりまわしては、たのしんでいた。しかし、3人とも山岳部員のくせ、ふしぎとヒマラヤとか、アルプスの話は出なかった。それには、わけがないでもなかった。

たしかに、ぼくたちは山登りが好きだった。しかし、同時に、山登りだけでは何かものたりない、つまらないという気持ちがあった。とくに、近ごろのように、登山人口が多くなったために、夏山はおろか、冬山でも、あらゆる尾根、谷、峰々にひとびとがおしかけ、あらゆる岩壁という岩壁に、

ハーケンやボルトがうちまれるとなると、そういう気持はいつそう強くなる。といって、もし、まだ人の登ってない岩壁なんかがあると、とびついていきたいかということ、そうではない。どうも、すこし趣味がちがうようだった。

ぼくは、すでに中学1年の時から山岳部にはいって、山登りをたのしんでいた。しかし、どういふものか、「ゆめ」というものが、ヒマラヤの処女峰をきわめようとする登山家よりも、未踏地にわけり、未知のものを見つける探検家につながっていた。ガストン・レビュファ^{*3}やヒラリー^{*4}の本より、スヴェン・ヘディン^{*5}やV・フックス^{*6}、ハイエルダール^{*7}の本のほうが、むしろ、ぼくにはお気にめしていた。多くの大学受験生にとって悩みのたねの、「志望校」「志望学部・学科」の決定も、ぼくにとっては、しごくかんたんなことだった。探検大学といわれていた京大へいき、探検(当時のぼくの頭には、南極がおもにあったようだが)をやるために、理学部にはいるこ

^{*3} フランスの先鋭的登山家。アルプスの岩壁登攀の開拓者。

^{*4} エドモンド・ヒラリー。世界最高峰エベレスト(サガルマータ)峰の初登頂者。

^{*5} スウェーデンの探検家、地理学者。中央アジアやチベット高原の探検を精力的に行い、さまよえる湖ロプ・ノールを発見。

^{*6} イギリスの極地探検家。南極横断に初めて成功。

^{*7} ノルウェーの探検家、人類学者。南太平洋のいかだで漂流して、民族移動を検証した『コンチキ号漂流記』やイースター島での巨石文化を調べた『アク・アク』などで有名。

^{*1} 当時京大理学部学生。その後、地域住民運動に従事。現在、日本労働党京都府委員長。自営業。由良隆に改姓。

^{*2} 当時京大農学部学生。その後、昆虫生態学・熱帯生態学の研究に従事。京大生態学研究センター教授在職中、ホルネオ島での飛行機事故で死亡(1997年)。



35年前の学生たちの軌跡

これから何回かにわたって連載する予定の報告は、現在の私ではなく、35年前に学生だった私の書いた記録である。私は当時、京都大学探検部に所属する理学部学生であったが、私を含めた3人の学生と、南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち、そして2年近くを費やして1968年によく実現した。当時、国外ではベトナム戦争が続き、国内では公害問題と大学闘争の嵐が吹き荒れていた。このような時代の波を受けつつ、私たちの「探検隊」は旅立ち、そして戻ってきた。帰国後、私はその記録を残しておこうと、約半年かけて書き上げた。この原稿は某新聞社から本として出版しようというところまで漕ぎつけたが、いくつかの不運が重なり、結局、そのまま35年間、私の家の押入れに眠り続けることになってしまった。

この記録は、探検の思い立ちから帰国まで、私たちは何をやり、何を見聞きし、そして何を考えたかを、あくまで私自身を通して記したものである。読み返してみると、若者らしい青臭さや、気負い、時には気恥ずかしくなるような記述もあり、文章も学生らしく未熟で稚拙な部分も多々見られる。しかし、今回、若干の字句の修正をのぞき、敢えてそのまま『科学』に載せていただくことになった。

今頃になって、なぜこの記録を世に出そうと思ったのか、ひとつの理由ははごく簡単である。探検とは、科学研究と基本的に同じ営みであり、社会に報告されてこそ意味があるという、私の素朴な気持ちからである。もうひとつのそしてより積極的な理由は、私たちがチリ・パタゴニアの探検へと駆りたてた「未知への憧れ」とは、いったい何であったのか、もう一度検証したいという気持ちからである。

探検とは、古典的には、大航海時代に始まる地理学的探検であった。しかし、その後、19世紀以降の近代合理主義としての科学の勃興と共に、地球上の、特に人跡希な、あるいは「未開の」地域での自然や人文現象を探り、解明するという野外での科学という側面を含めた行為として、探検ということばが広く使われてきた。探検とは、近代科学の営みの一環として位置づけられてきたのである。しかし一方で、近代科学は帝国主義国家の文化的基盤として発達し、現在における先進国と発展途上国の落差を作り出すことにも一躍買って来たという側面もある。

探検は、その一翼を担って、帝国主義列強の国々が、自らの植民地やその候補地の自然や人文現象を、支配者側の立場から調べるといふ、影の部分も付きまとった行為であったことも否定できない。

私たちがチリ・パタゴニア探検を行った1968年から69年は、近代科学がもつこのような影の部分について、公害問題や大学闘争を通して批判された時でもあった。しかし、このような光と影が交錯しながらも、自然に魅かれ、未知への憧れを駆り立てる「探検」という行為はやはり、人類全体にとっても、どこかポジティブで普遍的な価値をもっているはずだという心情を、私はいまも捨てがたく持っている。現在の地球環境問題も、先進国が進めてきた科学の負の所産であると同時に、その科学自身が明らかにした問題でもあるという皮肉な側面をもっている。人跡未踏のパタゴニアの自然に浸り、それを調べたいという学生の時の衝動は古き時代の価値観の残滓であったのか、それとも、地球にすむ人類が共有する、より普遍的な感情によるものなのか。大げさにいえば、私自身の地球(あるいは自然)観の原点を改めて確認しておきたかったのである。それは同時に、当時の私たちと同じ世代の今の若者たちにある(という)「理科ばなれ」や「科学ばなれ」がなぜなのか、という疑問にもつながっている。若い人たちは、この探検記をどう読んでくれるか。大学での教育にもかかわる身として、ぜひ知りたい。

この探検に参加した学生(学部生3人、院生1人)4人のうち3人は、これをきっかけに、フィールド観測・調査にもとづく気象学・雪氷学や生態学を、研究者として続けることになった。しかし、非常に悲しく残念なことに、うち私をのぞく2人は、フィールドでの研究調査中の遭難と事故ですでに他界している。1人は井上治郎氏(当時京大防災研究所助手)で、1991年1月、京都大学の中国雲南省梅里雪山学術登山隊にリーダーとして参加中、他の隊員16名とともに、雪崩に巻き込まれ、帰らぬ人となった。もう1人は、井上民二氏(当時京大生態学研究センター教授)で、1997年9月、サラワク熱帯雨林での調査に向かう途中、飛行機事故で亡くなった。この両井上氏への追悼の気持ちも込め、私たちの「はじめての探検」の記録を、何らかのかたちで残しておくのは、後に残された私の責務であると感じていたことも、3つめの理由である。



と以外は考えられなかった。

めでたく、京大理学部にはいることができたばかりは、さっそく、これまた伝統ある山岳部に入部した。探検部というのも気をひいたが、やはり山登りが好きだし、山登りは、また、将来の探検のためのトレーニングにもなるとおもい、山岳部にきめたわけである。

そして、ふたたび、山の生活がはじまった。春、夏、秋とスケジュールにおわれるごとく、山登りがつづいた。しかし、やはりぼくの「探検」への志向の気持は消えなかった。いや、むしろますます強くなるばかりだった。

ぼくはひそかに悩んでいた。山に行く計画をたてるたびに、もっとおもしろいところ、単に山に登るだけでなく、もっとやりがいのあることはないかとおもうのだった。部のなかに話しても、たいていは、わかってくれなかった。やはり、山岳部員は、山登りに熱中することに生きがいを見いだしているものあつまりなのだ。そういう意味で、ぼくは異邦人だった。さびしい晩秋の北山をひとり歩きながら、ぼくはこのままでいったいどうしようというのかと悩んだこともあった。

しかし、おなじように悩み、考えていたなかがいた。それが、その夜、あつまった2人だった。3人の気持は、しだいに一致していった。とにかく、たんなる山登りではない遠征をだそう。でも、どこに行くか。そのことで話ははずんでいたのである。

地のはてへ

ふと、ぼくのあたまの中に、高校生のとき、熱中して読んだ、ダーウィンの『ビーグル号航海記』*⁸がおもいうかんだ。とくに、南米南端をまわるくんだりが好きだった。その後、地のはてといわれているパタゴニア地域(図1)の本は機会あるごとに読んでいた。そして、高校以来持っている

地図帳に、将来いくべきところのひとつとして、ちゃんとしるしがいれられてあった。

世界の文明からもっともへだてられたところ、小型自動車なら吹きとばしてしまうというはげしい風、年中降りつづけるという雨、複雑きわまる、そして荒涼とした地形——草木もろくに生えていない乾燥したパタゴニア平原と、錯雑したフィヨルド群、無数の島々をちりばめたチリ側パタゴニアとそのあいだによこたわる大陸氷床——、いまだにカヌーをこいで、原始的な生活をしているモンゴロイド系のインディオたち、かつての大航海者たちのゆめのあとの、ほそい迷路のような水道や海峡、しだいに、ざっとこんなイメージをつくりあげていた。

とにかく、まず、この地のはてへ行ってみないか？ そして、行くなら、文句なく、チリ側の、諸島部から氷河のある氷床地帯にかけてだ。アルゼンチン側の平原は、今まで、それでもかなりの探検隊、登山隊がはいっている。動物、植物、地質、氷河といったものの調査も、何回かおこなわれているようだ。それに比べ、このチリ側、とくに、タイタオ半島以南、フエゴ島にいたるまでの、南北約1000kmの地域は、まだ、本格的な探検隊はほとんどはいっていないではないか。しかも、ちょうどこの地域は、年中、雨と風の世界最悪天候地といわれている。パタゴニアインディアンで、まだもっとも未開だといわれているアラカルフ族も、この諸島部のなかに残存している。氷河も、小グリーンランドのような氷床も、低いが、無数の未踏の山々もあり、われわれの登高欲もみたしてくれるのではないか。

ぼくの説得は、効を奏した。2人も同意してくれた。やっと目標ができた。山登りに実存をかけることのできないぼくたちは、ここに、地のはてへむかって、実存をかけることをちかって、あらためて乾杯した。しらぬまに、スキー合宿のことは、あたまから消えていた。とつぜん、階下から、下宿のおばさんのこえがした。「井上さん、もう帰ってもうてえな」。冬の夜は更けていた。

年があけ、1967年。ぶじ、スキー合宿も終え、

*⁸ チャールス・ダーウィンが20代の時、大英帝国海軍の測量艦ビーグル号に乗り込み、5年の歳月をかけて世界を周航して、世界各地の博物的記述をした記録。この時に得られた動植物の分布や生態についての知見が、彼の「進化論」の発見につながった(岩波文庫全3巻として翻訳がされている)。



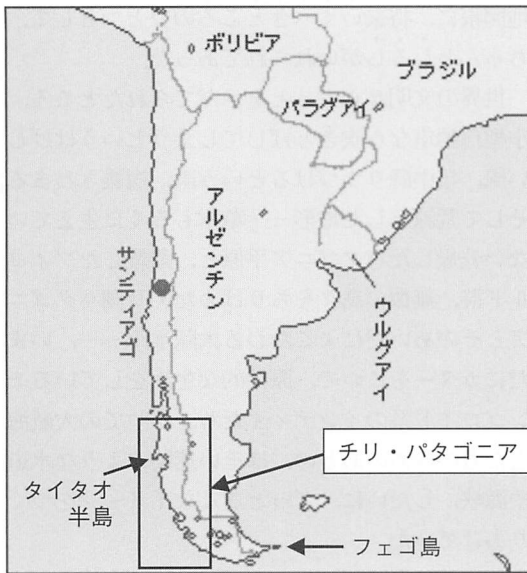


図1——チリ・パタゴニア。

大学は、後期試験をまえに、静かな時期にはいった。しかし、ぼくたちはそうもいかなかった。山岳部では、こんどは、試験後の春山の計画検討がはじまった。春山は、ぼくたち1回生にとっても、1年間の山登りの総括として、はじめての本格的な積雪期登山として、たしかに、たいせつなものだった。おおくのなかまは、その計画に、大いなる期待と、いちまつの不安をもって熱中していた。ぼくも、その例にもれなかった。しかし、ぼくたち3人は、べつ¹の道²をすす³み⁴だ⁵した⁶こともし⁷っ⁸て⁹いた。さし¹⁰あ¹¹た¹²つ¹³て¹⁴は、地¹⁵の¹⁶は¹⁷て¹⁸への資料¹⁹し²⁰ら²¹べ²²を²³や²⁴ら²⁵な²⁶け²⁷れ²⁸ば²⁹な³⁰ら³¹な³²か³³つ³⁴た。本格的に、山登りをやるには、じゅうぶんな計画検討、トレーニングが必要なのは、とうぜんである。が、山登り以外のことに熱中しようとおもえば、山岳部というものが、いかに重荷になるかということも感じていた。でも、なんとか春山だけは行こうではないか。雪にいだかれた山というのはやはりいいものだ。

が、これが意外な結果となった。

ぼくは、南アルプスへ6人ででかけた。聖岳という山のピークにいたる雪の斜面で、ぼくはふとしたことから転落し、数百m滑落した。まったく幸運にも、顔面にひどいすり傷をおっただけで助かった。ぼくは、自分のトレーニング不足以上に、山への情熱の不足を感じた。いっぽう、北

海道の日高山脈を縦走中の別のパーティでは部員のひとりが、雪びを踏みはずし、行方不明となり、山岳部は混乱した。

その混乱の中で、ぼくは思った。本質的に生きがいを見いだせなかった山岳部を、ぎまんに、惰性的に続けていくことは、そしてその結果、命をおとすようなことがあったとしたら、なんと馬鹿げたことではないか。山登りに熱中する者は、「山で死ねたら本望」でなくとも、少なくとも「山で死んだとしても、仕方がない」くらいの気持がなければならない。

本当に自分の生きがいになることにのみ、命はかけるべきなのだ。

探検部

4月にはいり、2回生となった。ぼくたち3人のあいだで、山岳部をやめ、あらたに探検部に入って動こうということは、いつとはなしに暗黙の了解となっていた。ぼくたちのやろうとする探検を実現するには、それが**いちばん早道**のように思えた。そこには、京大を探検大学とよばれるほどにした、戦前からの多くの先輩の伝統が息づいているかもしれぬという期待もあった。

が、その期待は裏切られた。探検とは、地球上の未知なところ、未開なところに乗りこんでいく、冒険とロマンに満ちたものと単純に思っていた。そして、探検部というのは、そういうものを目指す意気盛んな連中の集まりかとも思っていた。確かに、探検部が本多勝一氏⁹らによって創設された頃は、そういうイメージで通用したらしい。なにしろ、海外渡航することすら非常に困難だった時代だ。とにかく行くこと自体が価値あるとされていた。

それから10年。時代は変わった。世はまさに、海外旅行ブーム。外国に行くのに、気負う必要もない。未知、未開のところといっても、一部を除き、誰でもその気になれば、簡単にいける道は開けていた。南極しかり、ヒマラヤしかり、アフリ

⁹ ジャーナリスト。元朝日新聞記者。『カナダ=エスキモ』『ニューギニア高地人』『アラビア遊牧民』『アメリカ合州国』など、現地取材による著書多数。



かしかり、その残された一部をねらうというのはできる。山好きな連中は、よくそういう計画を立てる。いわば、懐古趣味的、疑似地理学的探検だ。ぼくたちのも、むしろ、この探検に近いだろう。

が、現在の探検部の主流は、そんなものでなくなっている。地図を見て、ここはまだ人跡未踏だ、ここは未開で、入るのが困難だ、などという価値判断自体、ナンセンスなのだ。「どこに行くのか?」という問いよりもむしろ、「行って何をするのか?」という問いが強調されていた。当然、ふだんの活動も、農村調査とか、植物採集、昆虫採集といった計画が多かった。ぼくたちのような「山派」はむしろ少数だった。これでは、専門学者の養成所ないしは、下請け機関ではないか、という疑問もわいてくる。実際、「探検部は、フィールド・ワーカーの養成機関としてしか、もはや存在価値はない」などと断言する先輩もいた。

ぼくたちは、そういう雰囲気反発を感じた。確かに、ひと昔前の探検のイメージを追求することは、非常にむづかしく、かつ無意味なことかもしれない。が、学者先生のまねごとではなく、学生にしかできないような、別の探検があってもいいのではないのか。

その一形態が、多くの探検部で行なわれている、スポーツ的、もしくは冒険的なものだ。激流下り、アクアラング、洞穴探検等。

そして、井上と伊藤は、反発心も手伝ってか、夏休みに、北アルプスの黒部川の難関、上の廊下をゴムボートで下る計画をたてた。がこれは、他大学に先を越され、あえなく挫折した。一番乗りをみざしていた以上、二番せんでやっても仕方がないからだ。しかし、この失敗の原因は、単に準備が遅れたということだけではなかった。なによりも、スポーツ探検を、亜流ないしは、単なる手段としか見ない部の雰囲気にあった。2人はまた、けん命に重箱の隅ほじりをしている「山屋」や「探検屋」が、この日本にいかとうようよしているかを知って、うんざりしたに違いない。スポーツ的探検は、いくらがんばったところでそれだけならあくまでもスポーツの一形態にすぎなかった。例えば、アクアラングを使っても、単にもぐ

るだけでなく探検部の海洋パーティがその夏に行なった、水中にテントを設営して24時間の滞在を試みるという計画ならひとつの新しい探検として意味を持っていた。

いっぽう、同じ頃、ぼくは部の仲間と北海道の山々を歩き回ったのち、紋別で酪農業を営むK先輩の家に立ち寄っていた。ちょっと休養のつもりで立ち寄ったのだったが、とても休養どころではなかった。毎日、朝早くから、乳しぼり、牛追ひ、牛糞運び、フォークを持っての乾草運び、サイロへの刈りこみ、……。激しい労働だった。にもかかわらず、ぼくには、すべてが楽しかった。休日には、K先輩と共に、付近の農家をまわり、酒を飲みながら、農民の話をきき、かれらの喜怒哀楽にふれ、酪農の民への認識が深まっていくという、知的な刺激にも絶えなかった。エリート社員の道をふりすてて、自ら貧農の道をえらんだK先輩の生き方自体、ひとつの感動的なドラマだった。

旅行といえば、押しきせの修学旅行の他は登山のための旅行以外、ほとんどしたことのなかったぼくにとって、この北海道旅行は、10日ほどの酪農地での泊まり込みのおかげで、大げさに言えば、ひとつの「発見旅行」でもあり、「旅行の発見」でもあった。こんなところに、こんな人々が、こんな生活をしている。そして、かれらはこんな問題をかかえている。そんなことを求めての旅行も、探検の属性の中心である「発見」の喜び、感動を得る可能性を秘めている。ぼくは、今まで理解できなかったへき地の農漁村調査を黙々と続けている部員の心情が、なんとなくわかってきつつあった。

要するに、京大探検部では、少なくとも海外遠征の計画に関しては、どこかに行き、何らかのテーマ、知的興味を伴ったテーマを追求するのになければ、部の計画として容認されなかった。各人の探検というものへのイメージは何であれ、この点に関しては、厳しかった。だから、何らかのテーマを持たず、あるいは持つことを拒否した形で、無銭旅行ないしはヒッチハイクなどに出かけた連中はすべて、休部ないしは退部して、個人の資格で出ていた。



探検部に対する、当初の期待は裏切られたが、ある意味では、裏切られて当然であった。ぼくたちの計画も、「行って何をするか」が次第に重大な問題になっていた。たとえ人跡未踏の地であれ、世界中の詳細な地図ができていた現在、スポーツ登山でない限り、何らかの知的興味を追求するものでなければ、意味をなさない。チリ・パタゴニアで何をするか？ それは、多くの学生の探検、旅行計画によくある、行くために、他人を説得するために、形のごとく、〇〇学調査と計画書に書き、現地に着くと、そんなものは口実だったと開きなおって何もしない、あるいは形式的に済ましてお終い、にしてはならなかった。何よりも、自分を説得するものでなければならなかった。嵐に遭おうが、大障害に道をはばまれようが、あくまで貫徹できるものでなければならなかった。

テーマの問題

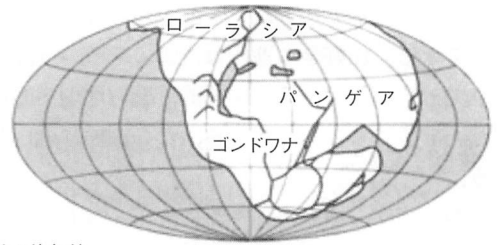
そんな5月のある日、ぼくは大阪大学の川井直人教授をたずねた。川井教授は、2~3年前、チリに調査にいかれたときいていたからだ。その調査とは、古地磁気学調査というものだった。

古地磁気学とは、岩石に残っている、その岩石の生成時の、残留地磁気の方向、強さなどを調べて、かつての磁極の位置、ひいては大陸移動などを考察しようという学問。簡単にいえば、そういうことができる。

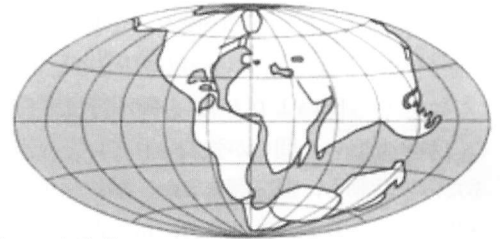
川井教授は、ぼくたちがチリ側のパタゴニアに行こうとしていることを知って、大いに喜んだ。彼は力説した。

「南米は、古地磁気学上のデータのまだ少ないところや。ぼくが行ったのは、チリ中部のコピアポ平原付近だけや。パタゴニアへも行きなかつたが、いろんな事情で行けなかつた。そやから、行ったら、岩石磁気用の花崗岩のサンプルをぜひ取ってきてくれ。石を取るトレーニングは、ぼくんとこに來い。パタゴニアか！ ええなあ。ぼくも暇やったら行きたいなア」。ざっと、こんな調子である。

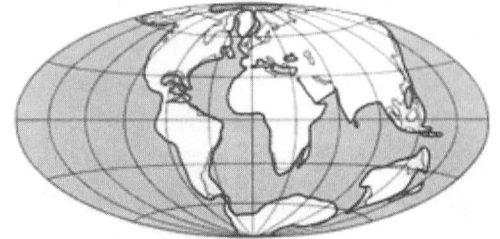
さらに話をきくと、とくに南米最南部は、南米大陸の移動を考えるうえに1つのカギとなって



(a)約3億年前



(b)約6000万年前



(c)約200万年前

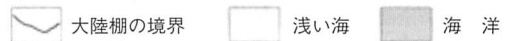


図2—ウエゲナーの考えた大陸移動。

いながら、まだ古地磁気学の調査が行なわれていないところだという。

これだ。こいつを1つのテーマにしよう。いや、ぼくのテーマにしよう。もとよりぼくは、地球科学を志していた。与えられたかたちのテーマとはいえ、ぼく自身の地球科学入門としてやってみよう。大陸を動かすということは、理屈ぬきにロマンチックではないか。

やがて、伊藤、井上もそれぞれ、自分のテーマを見つけていった。伊藤は物理学志望だったが、チリ・パタゴニアが多雨寒冷であることに着目し、苔類の収集を、井上は、氷河時代の遺物として無数に残された湖沼の調査と、昆虫採集をすることに決めていった。昆虫の中には、探検部の顧問でもある吉井良三教授から依頼されたトビ虫(教授にちなみ、ヨシイ虫とあだ名されている)なども予定に入っていた。また、2人とも、蝶採集にかけてはうるさく、競い合って網をふることになる



だろう。

行ける可能性ということに関しては、実質的に何も変わってはいないが、計画もこれで一步前進した。少なくともそういう気分になるのだった。今まで、自分たちの間だけで了解し、誓約し合っていたことが、テーマを決めるということを通して、いわば第三者に働きかけ、説得する段階に入ったことになるからだろう。逆に、テーマを決めたことにより、ほくたち自身がそれに拘束されるような矛盾も感じだしていた。もちろん、テーマを決めることを破棄することはできない。探検の真髄は、情念のみであろうが、情念だけでは何もできないからだ。具体的な目的を追求する行動の中にこそ、情念は発揚できるのである。

ポリビア計画の出現

同じ頃(1967年末)、探検部内に別の計画が進行しつつあった。山本紀夫*10、渡辺信*11両君のポリビア栽培植物計画である。2人とも、農学部農林生物学科の学生である。4年間の探検部での模索の結果、また、植物を扱う学問を志す第一歩として出てきた計画である。

探検部というのは、けったいなサークルであった。新入生に対する入部勧誘もいっさい行なわず、それでもどこからともなく探しあててやってきた者には、「やめとけ。君のためにならんぞ」などとおどして、できるだけ入部しないようにしむける。それでも、毎年、10人から20人の新入生が結局、入部していく。が、入部しても、入部金、部費を払うこと、および週1回の部会には出席すること、以外には、何の義務も拘束もなかった。合宿と名のつくものがあっても、すべて自由参加だった。要するに、原則的には何をやっても自由であった。あるいは、何もしなくても、自由であった。よくこれで、組織として成り立つなと思われるかもしれない。確かに、ふつうの学生サークルの組織のイメージ——決められた練習日、合宿、ひとつの目標にむかって、部員全体が動き、上級生が指導する、それによって、下級生も何かを修

得し、上級生になれば、同じことを指導する。そして部には何らかの具体的な技術や能力が蓄積され、さらに、それを求めて新入部員が門をたたき、蓄積を伝承し、維持するために、古参は新入部員を勧誘する——というイメージからは理解できない組織であった。ほく自身、山岳部というれっきとした運動部で育っていたため、入部した時は、戸惑い、不満にも思った。が、それには、それなりの理由があった。

探検というものへの各人の定義や考え方はさまざまであり、部内で議論しても、結論が出るものではなかった。しかし、探検が何であれ、はじめからおわりまで、自分で考え、自分でみつけ、自分で行動するもの、自らの創造性の発揚そのもの、には違いなかった。たとえ、どこかに行き、何をやろうとも、それが他人に言われて、あるいは他人のおしきせで行なったものなら、何の意味もないのだ。それ故に、新入部員に対しても、上級生は何をせよとは言わない。また、言えない。が、多くの部員、特に、受験勉強という、自立的思考の寸分の余地も入らない過程をへてきたばかりの新入部員は、あり余る「自由」にかえって、悩み、苦しんでいた。非人間的な抑圧や束縛を受けている者は、その解放された状態として、自由を考える。が、その抑圧や束縛から解放されても、自立的に考え、行動する精神がなければ、その自由も苦しみ以外の何ものでもない。いや、自立的精神の中にこそ、自由は存在するといってもいい。

「これをせよ、と言われた方が、よっぽどいいです」という新入部員がいたが、そんな人間ははじめから探検をやる資格はないのだ。もちろん、アドバイスや共同討議、相互批判はある。相談相手としての先輩や顧問も、多くが大学内や京都にいる。自分の行動や計画をより価値あるものにするために、そういったものを利用する。探検部の存在意義は、まさにそこにあった。

何かしたい、何かせねばならぬと悩む者がいる一方で、黙々と何かをやっている者もいた。悩める者は、時にはかれらの計画に加わったり、あるいは、小さくとも、自分で何らかの旅行計画や調査計画をたてたりして、自分のすべきこと、したいことを模索していった。悩みの理由としては、

*10 現在国立民族学博物館教授(文化人類学、民族植物学)。

*11 現在富山大学教授(植物分類学)。



表面的には部内の「自由さ」であったが、その底には、すでに20世紀も半ばをすぎた現代における、「探検」のイメージの混乱があった。今さら「探検」でもあるまいに、とも言われ、「探検」の大衆化時代とも言われていた。いや、「探検」とは前衛的である故に、本来「大衆化」されうるものではない、「探検」はつねに、時代を先取りするものだ、という反論もあった。そういった背景の中で、なおも、「探検」という漠然としたものに憧れ、もしくは未練を持っていた者が、探検部には集まっていた。

やっと自分にとっての「探検」を見つけ、計画を進めても、部員の批判をのりこえられず、あるいは、具体的な準備——資金や交通、現地交渉、隊長等——で何かの障碍にぶつかり、挫折し、消耗してやめていく者も多かった。入部時の、「やめとけ。君のためによくない」というのは、そこまで見通した上での、先輩の「親ごころ」だったのかもしれない。

さて、山本・渡辺の2人は、はじめから目的をもって入部したぼくたちと違い、3~4年間というもの、常にそのように模索し続け、いったんは別の計画をたてて失敗し、消耗した後に、再び今度の計画を練り上げてきた。それだけに、計画もめんみつなものであり、2人にも、今度こそはという、自信に満ちたものがあつた。すでに、農学部の田中正武助教授がリーダーとして内定しつ

つあつた。目的も明確で、アンデス起源の栽培植物——トウモロコシ、トマト、タバコ、ジャガイモなど——の調査を主にジープでやるという計画だった。田中助教授を中心に、ひとつの目的を追いかけていく、アカデミックなものだった。もちろん、かれら2人の情熱の底には、学問などとは無縁なイメージ——白いアンデスの山々、インディオの市場のざわめき、笛や太鼓の民謡の響き、インカの遺跡、アマゾン源流の密林——などが交錯していたことだろう。そして、そのためにこそ、しゃにむに計画をたててきたといつてもいいだろう。しかしとにかく、2人の計画は、1人の教官をくどき落すだけの説得力を持っていた。

いっぽう、ぼくたちの計画は、いかにもシロウトくさい。目的も三人三様。それも皆、今までやってもみたことのないことがほとんどだ。隊長もまだ決まっていない。計画としても、現地での行動方法、調査のやり方に、かなりの困難がある。探検部内の計画は、ある程度までは、良い意味のライバル意識がはたらくが、ある程度以上突つてくると、食うか食われるか、という敵対関係になりやすい。特に、同じ南米であり、時期も同じ頃という今の場合、なおさらである。最終的には、部長教授の判断で計画を決め、募金などの準備を開始する。その際、より「立派な」計画が当然、有利になる。

これは、へたすると食われるぞ。ぼくたちはあせつた。

